雲南・ビルマ最前線における慰安婦達－死者は語る

浅野豊美

1　はじめに

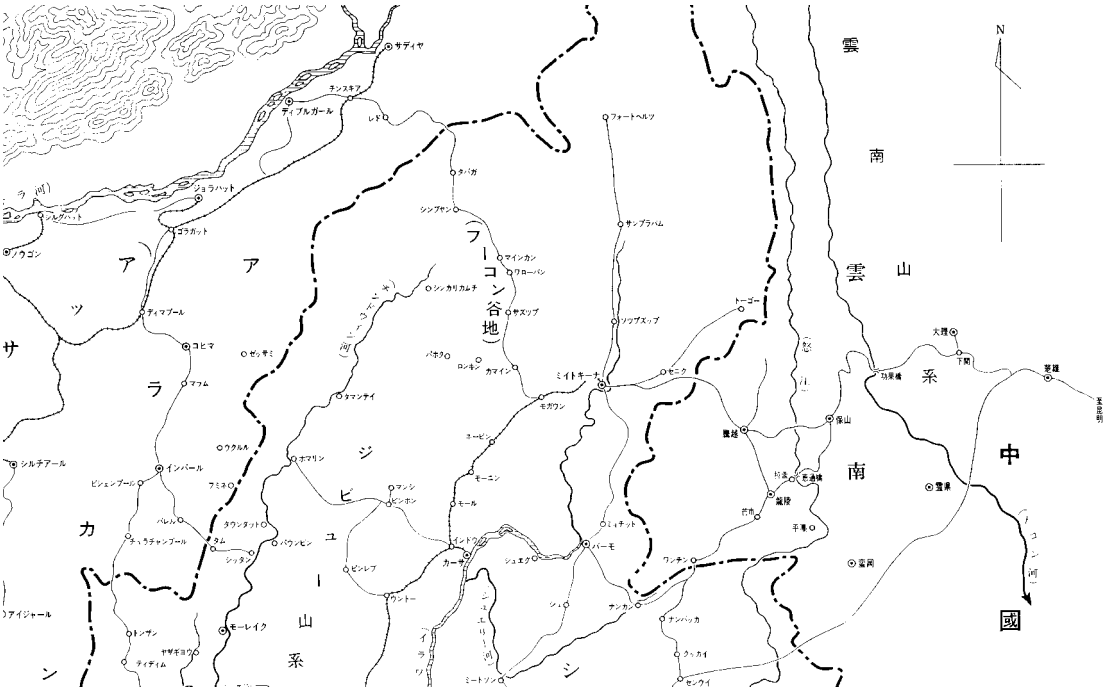
北ビルマ戦線で連合軍の捕虜となった日本軍「慰安婦」（以下括弧を付けずに用いることとする）の尋問記録と写真が発見され、それが話題を呼んでから既に５年余りが経過している。慰安婦達のその後の足跡を探るべく、筆者は1997年に米国で計40日余、1998年に台湾で8日余、関連資料の存在状況に関する予備的な調査を行った。残念ながらその足跡を現代にまで辿ることのできるような核心的な資料は今のところ発見できていない。しかし、その過程で北ビルマにおいて、慰安婦達が連合軍側に収容される前後の日常生活と戦線の状況を物語る数多くの写真資料と若干の文字資料を得ることができた。以下の本論では、こうした材料をもとに、社会史・国際政治史的な関心を織り込みつつ、いかなる環境の下に慰安婦達の生活は置かれていたのかについて、個人的な推測をまじえつつ論じてみたい。

慰安婦問題に関しては、強制性の有無・軍の関与の度合いという点に関して、論争が展開されてきた。しかし、よく考えてみると、こうした問題は慰安婦が呼び集められる過程、もしくは通常の慰安所の運営に関するもので、資料的な制約もあり、静態的な制度分析や統計を主な分析手法として依拠せざるを得なかった[1)]。しかし、筆者は総力戦体制下に出現した慰安婦制度が、それまでの公娼制度とどのような面で継続性を持ち、どのような面で断絶性を有しているのか、その性格が最も端的に示されるのは、最前線の戦場であると考える。戦場という生死を分ける極限的状況の中で、慰安所はどのような様相を呈していたのであろうか。本論は、北ビルマをケースとして分析を進め、慰安婦制度の有した性格の新たな側面を明らかにすることに貢献せんとするものである。

2　北ビルマにおけるインパール作戦後から終戦に至る戦況

1944年初頭から開始されたインパール作戦が春を過ぎ敗色濃厚となる中、連合軍は逆に北ビルマと雲南方面から総反攻を開始した。慰安婦が大勢送られていた北ビルマでの本格的戦闘は、雲南前線方面では1944年5月11日から、最北端に位置するミチナ（ミイトキーナ）[2)] 飛行場周辺では5月17日から始まった。激しい戦闘行為が終了し日本軍の抵抗が止んだのが、ミチナにおいては、8月3日の夕刻、雲南方面の拉孟（松山）では9月8日、騰越では9月14日である。

北ビルマと雲南方面の戦略的な重要性を踏まえつつ、この間の戦闘の経緯について述べよう。連合軍の北ビルマ反攻の戦略目的は、レド公路の開通にあった。これは、ベンガル方面から伸びるアッサム鉄道の終点にあたるレドから、アラカン山系を越えてミチナ→騰越→保山（もしくは→騰越→拉孟→保山）→昆明、そして重慶に到る援蒋ルートを再開することにあった。一方の日本軍は、


N
雲
南
雲
山
系
中
南
國
サディヤ
ディブルガール
レド
ジョラハット
ゴラガット
ブラゴン
ティマプール
コヒマ
マラム
インパール
シルチアール
ビシェンプール
タウンダット
パウンビン
モーレイク
ミートソン
カーサ
ウントー
ビンロン
モール
ミッチナ
バーモ
ワンチン
ナンカン
ナンパカ
クッカイ
センウイ
ムセ
ラシオ
ラムガ
ラムチャンプール
ヤザギョウ
ティディム
トンザン
アイジャール
ビンレブ
ジュエク
シュエリー河
イラワジ
ミッチナ
ミッチナ
ミッチナ

て開始された。ミチナの西飛行場がすぐに占領されて以後、日本軍はその後方にある市街地へと退却し、自然の地形を利用して防御を続けた。フーコン峡谷からぞくぞく進行してくる連合軍をミチナより少し鉄道で南に下ったモガウン付近で押しとどめるための作戦が第18師団によって行われており、雲南方面から進行した中国のビルマ遠征軍に対しては第56師団による防戦が展開されていた。そのため、元来18師団に属していた丸山大佐を中心とするミチナ守備隊への兵力補充は思うに任せなかった。雲南方面を守備する第56師団に対しては、ミチナ守備隊に対して、応援部隊を派遣するように、第33軍から直接命令が下されたが、第56師団の参謀長の独断により、応援部隊の人員は極端に減らされ、増援部隊として派遣された水上少将には、十分な兵力が与えらないこととなったのである。また、雲南方面でも防衛の核となる決戦地が、怒江沿岸から東に入った内陸部の龍陵と決定されたために、沿岸に近く北に離れた騰越や拉孟の守備隊は完全に孤立し、やがて籠城戦を経て玉砕していくこととなる。以上が、ミチナと、雲南方面の大まかな状況である。次に、拉孟、騰越、ミチナの順で、慰安婦関係の断片的な資料をもとに各地の詳細な戦況と関連させつつ、どのような戦況下で慰安婦たちが死亡し、或いは捕虜となっていったのかを論ずることとする。

3　拉孟近郊の松山陣地

まず、**写真A**をご覧頂きたい。これは、既によく紹介されている写真であるが、「松山」という場所で、1944年9月3日に撮影されたものである。松山とは、日本側で拉孟（中国語の表記は、「臘猛」）と呼び習わした街の近郊にある山の名で、日本側が強靭な陣地を構築して最後まで立てこもった場所である。

写真A　1944年9月3日松山にて　アメリカ写真部隊撮影

この写真のキャプションには、「ビルマロード上の松山という地点の村で、中国第８軍の兵士によって捕虜にされた４人の日本女性」[3] と記されている。一見して目に付くのは、汚れた着衣、１人の妊娠したお腹、左脇に笑顔で屈んでいる男性、その横に転がっている捕獲されたとみられる銃、などであろう。松山陣地と拉孟市街、ビルマルートとの関係については、**図２**を参照されたい。

この写真史料に映像として刻まれている松山の慰安婦については、２つの対応資料を米国と台湾で見つけることができた。最初に紹介したいのは、ワシントンのナショナルアーカイブに保存されている「ラウンドアップ」というビルマにいた米軍兵士の間で読まれていた新聞である[4]。「ラウンドアップ」の同年11月の記事によると、松山で捕虜となった慰安婦は、朝鮮人が４人で日本人が１人とされており、写真に出てくる慰安婦4人と同じである。また合計で５人という数字は、中国側でビルマ遠征軍司令長官から蒋介石に送られた９月７日の記録[5] に、「敵婦五名」を「俘虜」にしたとあることからも裏付けられる。

「ラウンドアップ」のタイトルは、「日本の慰安婦」（原文：“JAP COMFORT GIRLS”）で、ウォルター・ランドルという記者によって執筆された。ビルマと雲南の国境地帯を北から南に流れ

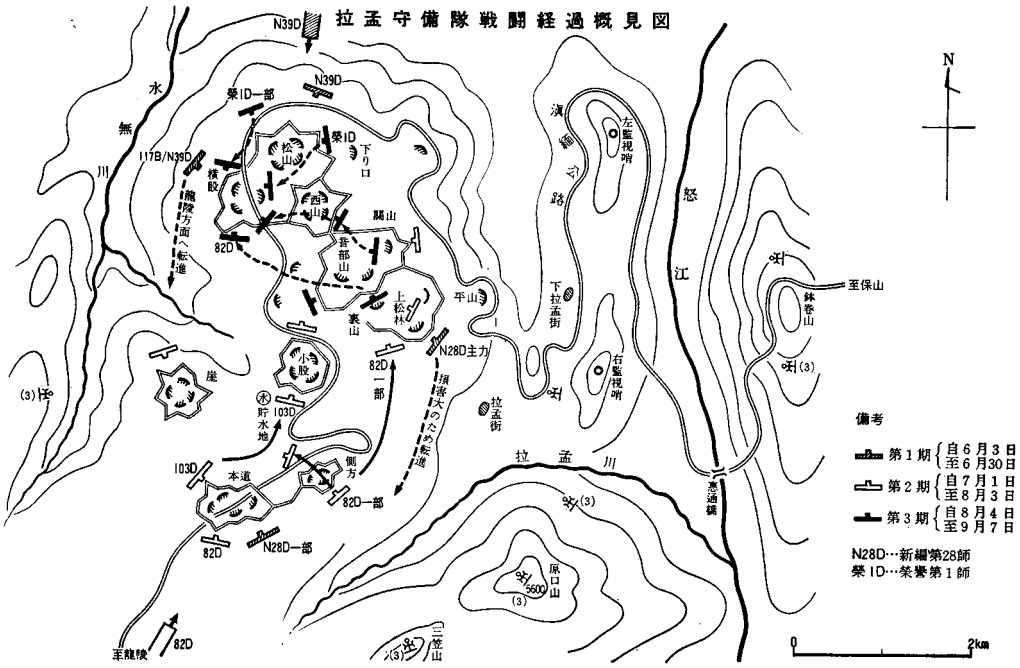


図2　防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書 イラワジ会戦－ビルマ防衛の破綻』朝雲新聞社、1969年、284頁より引用。

ている怒江（別名：サルウィン河）前線から寄せられたものと但し書きがついている。また、ランドル記者が慰安婦にインタビューをした際に通訳を務めたのは、「満州から脱出してきた日本語を話す中国人学生」で、恐らく写真の左端に笑顔で写っている青年がそれだと考えられる。

写真から一見してわかるのは、過酷な環境に長期間置かれてきたことである。写真に写っている汚れた着衣は、船がシンガポールに寄港した際に買った綿製の洋服であったという。２年間にかくも汚れてしまったわけだが、特に６月７日から３ヶ月間に及んだ孤立無援の戦いの中で、着の身着のままの状態が長く続いたのであろう。それは衣服のみならず、髪の毛の様子からも窺われる。7月中旬に第１貯水槽が破壊されると、水道施設の機能は停止し、守備兵は夜間に水袋を背負って川まで降りて給水を続けたという[6]。水が欠乏していたのである。

インタビューをもとにまとめられたこの記事によると、慰安婦達の年齢は、24歳から27歳で、捕虜となるまでの経緯は以下のようであった。

1942年の4月初め、日本の官憲が朝鮮の平壌近くの村に来た。彼らは、ポスターを貼ったり大会を開くなどして、シンガポールの後方基地勤務で基地内の世話をしたり病院の手伝いをする挺身隊（原文では、“WAC” organizations ）の募集を始めた。４人はどうしてもお金が必要だったのでそれに応じたという。ある女の子は、父親が農民で、ひざを怪我してしまったので、応募の際に貰った1,500円（米ドルで12ドル：原文）で、治療代を工面したという。そのような形で集められた18人の女の子の集団は、同年６月にいよいよ朝鮮から南へと出港することとなった。道すがら彼女たちは、日本の大勝利と南方で新しく生まれようとしている共栄圏についての話をたくさん聞かされた。しかし、船が約束のシンガポールに立ち寄っただけで、そのまま通過してしまってからは心配な気持ちが広がり始めた。ビルマのラングーンから北へ

と向かう列車に積み込まれたときには、もはや逃れられないと運命を悟ったという。

行き先が、シンガポールのはずであったのに、ビルマの北の果て、最前線に実際は送られたことに対して、彼女たちには何の説明もなかったことが分かる。況や、そこがどのような場所で、いかに危険な場所であるかに対しても、何の説明も行われなかったのは明確であろう。

一団が、怒江最前線にある松山陣地に到着すると、4人はある1人の年上の日本人女性によって監督されることとなった。この日本人女性は35歳で、それまで職業として売春を行ってきた人物である。彼女も松山の包囲掃討作戦の最中に同じように捕虜となった。この女性の写真と考えられるのが、**写真B**であり、**写真A**と同じ場所で同じ９月３日に撮影されたものである[7]。写真から丁度35歳ぐらいの日本人女性であることが分かるであろう。松山で捕虜になった日本人女性は９月７日にもさらに１人いたことが、**写真C**[8]からもわかるが、**写真B**の日本人女性と４人の朝鮮人慰安婦の写真が、松山で９月３日に時間と場所を同じくして撮影されていること、先に紹介したように、９月７日付の中国軍記録でも5人の「敵婦」が捕虜となったとされていること、以上の２つから考えて、この監督をしていた35歳でプロの売春婦上がりの日本人女性というのは、この**写真B**の女性に間違いはなかろう。すると、**写真C**の女性のことが気になるが、『ラウンドアップ』の当該記事の冒頭では、合計で10人の日本と朝鮮の女性が捕虜になったと記されていることから、**写真C**の女性を含め、９月３日以後徐々に、慰安婦の数が増えて、『ラウンドアップ』のいう10人に達したものと考えられる。

写真B　1944年9月3日、松山にてアメリカ写真部隊撮影

写真C　1944年9月7日、松山にてアメリカ写真部隊撮影

更に記事は続く。松山には全部で24人の女の子がいて、「慰安」以外にも兵士の衣服の洗濯や料理、洞窟の清掃などの義務があったという。しかし給料は全く支給されず、故郷からの便りも届かなかった。中国軍が松山を攻撃した際に、女の子たちは地下壕に避難したが、元々いた24人のうち、14人は砲撃によって殺害された。日本軍兵士からは、もし中国軍に捉えられたら、ひどい暴行を受けることとなると教え込まれ、皆その話を信じきっていたという。彼女たちは国元の家族を守るため本当の名前は口にしたがらないが、この２年間に強いられた生活で、日本人の指導者達に対するかつての無邪気な信頼はすっかりひっくり返ってしまったと異口同音に語っていた。

以上紹介した記事の中で、第１に印象深いのは、手紙が届けられず、報酬も貰えなかった点である。末端の兵士にとって何より元気付けられる故郷からの手紙は、慰安婦達にとっても同様であったはずである。身寄りの少ない貧しい女性を中心に慰安婦を選んだとしても、故郷に全く音信を伝える必要がないわけがなかろう。記事に出てきたような怪我をした父親と、何らの連絡も取れなかったというのはいかなるわけであろう。精神的な支えもなく、給料という現実の報酬もなく、「慰安」と兵士の身の回りの世話に追われる彼女たちの実態は、「奴隷」とさして変わらなかったのではなかろうか。慰安婦の生活を戦況の中で考察してこそ、こうした位置づけが意味を持ってくると考える。実際に彼女たちを拉孟に連れて行った女衒である「K」について、以下のような会話が記録されている[9]。

「悔しい思いをしとります…」それは、1943年のことだ。彼の慰安所にいた「慰安婦」達も各地を転々と移動したが、拉孟の部隊に行った頃から戦況は悪化の一途をたどり、とうとう中国軍に包囲され、身動きできなくなった。その頃K氏は軍御用商人の仕事に移り、彼の手から離れた「慰安婦」達は、実質的には部隊付きになっていた。「私の友人の下士官に女の行方を聞いたんですよ。そしたら、慰安婦を壕に入れろという命令が下り、その直後に手榴弾を投げ込んで殺したというんですわ」

この回想の中の1943年は、実際は、1944年の誤りであろう。手榴弾を投げ込んだことに関しては、中国軍の９月６日の記録の中に、松山の「黄家水井」に日本軍の死体が106体、遺棄されており、その中に中佐の死体１体、「女屍」６体があったことを付け加える[10]。もしかしたら、これが「壕に入れろという命令」により、手榴弾を投げ込んで殺した慰安婦だったのかもしれない。

最後に象徴的なのは、船で南方へと出港する際に、吹き込まれた共栄圏の理想が、最前線での生活の中で恐ろしいまでに裏切られていったことであろう。それは、慰安婦を連れていった「女衒」達にとっては、最前線に送り込まれる女性達の不安を鎮めるためにした物語のようなものに成り果てていた。アメリカのランドル記者の取材が、そうした日本人や朝鮮人のモラルや動機に向けられていたことが、『ラウンドアップ』の記事から読みとることが出来る。この点は、後述するミチナのケースで、心理情報作戦を遂行するための材料収集を目的として、慰安婦の尋問記録が残されたことと考え合わせ、資料として残される記録自体の性格や歴史的価値を吟味する上で興味深い。

４　騰越（中国名「騰衝」）

騰越は、明代に築かれた中国の城壁都市である。最初に作られた援蒋ルートであるラングーンから昆明に抜けるビルマルートの北方、騰越平野の中央に位置しており、人口は４万人で怒江地区の「政戦略上の要衝」[11]であった。城壁はほぼ正方形で、１辺が約１キロで、城壁の高さは約５メートル、外側は石、内側は積土によって構築されていた。雲南から攻め込んできた中国軍との決戦場が、龍陵に決まってからは、守備兵が抽出され、戦力は減少する一方であった。孤立した戦いが展開されるが、まず騰越城の周囲の山々に築かれた砲台陣地が６月下旬から攻撃され、７月４日からは騰越城の中央門に対する砲撃と航空機による爆撃が開始された。以下**図３**が騰越付近の戦闘経過概見図、**図４**が騰越城内市街戦の展開図で、いずれも戦史叢書からの引用である。

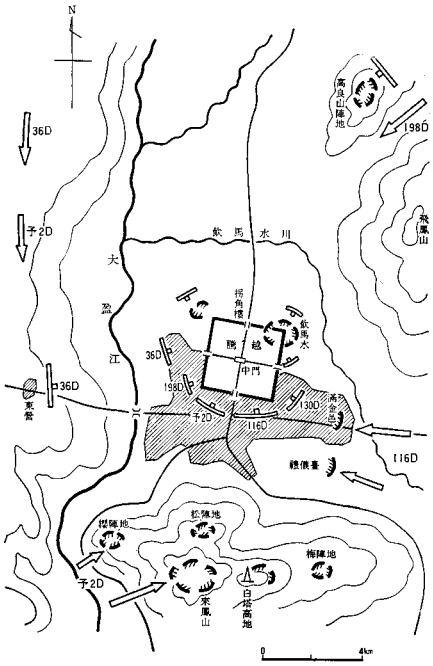


図3　騰越城付近戦闘経過概見図。『イラワジ会戦』294頁より引用。

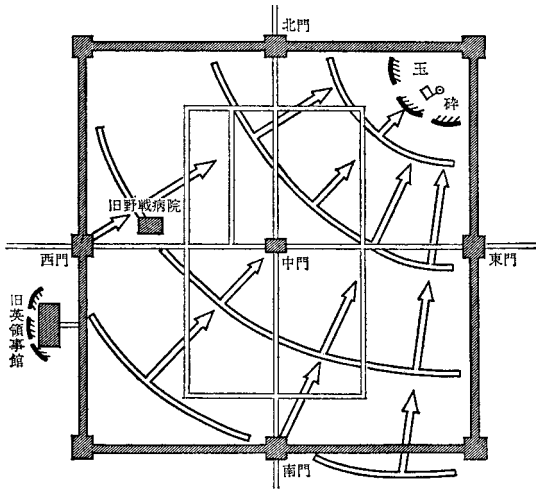


図4　騰越城内市街戦展開図。『イラワジ会戦』302頁より引用。

写真D　騰越城内の城壁の角に、散乱する死体（1944年9月15日）

この騰越の戦闘で死亡した、慰安婦らしき女性の写真が、米国のナショナルアーカイブにあった。思わず目を背けたくなる写真ではあるが、冥福を祈りつつあえて掲げさせていただく。ところで、米軍の写真部隊が撮影した写真の中には「日本人の死体」「朝鮮人の死体」という分類に付された

写真E　死体の埋葬をする３人の中国兵と女性の死体（1944年9月15日）

一群のおびただしい死体の写真が存在している。戦場の心理を反映しており、とても正視に堪えないものが多い。著者もそうしたアルバムの閲覧中に、途中で吐き気を催し、モノが喉に通らなくなった。これは、そうした写真のごく一部を抽出したにすぎない。

写真D[12] のなかで、何よりも注目に値するのは、上部左から中央にかけての土壁と、中央部から右側にかけての白壁、および白壁に残る弾痕である。騰越城の玉砕は、**図4**に示されている通り、城壁の四隅の中で北東の角が最終陣地となって行われたこと、この写真の日付が、玉砕の翌日の15日である事を考え合わせると、恐らくこの写真は、その北東の角の最終陣営辺りを写したものであろう。また左側の壁の材料が漆くいのないものであることから、カメラマンは角の北側の城壁の前に立って、東の城壁（漆くいのない壁）にカメラを向けて写したのではないかと考えられる。画面右側の漆くいのある壁は、城壁に沿って建てられた家屋のものではなかろうか。

写真の中央部やや左に、横臥している２つの遺体があるが、その左側の方は、爆風もしくは火炎放射器の火炎によって、衣服がめくれ上がり胸部が露出している。その様子から明らかに女性のものであることがわかる。めくれた衣服と左腕によって顔はほとんど見えないが、ほんのわずか鼻からあごにかけての部分がすこしだけ覗いているようにも見える。腹部から大腿部にかけて、火傷による黒焦げの跡が痛々しく残っている。この写真のキャプションには、「日本軍兵士及び女性の死体」との説明が付けられているが、「女性」という部分は、タイプではなくペンで書き加えられている。

写真E[13] は、一見してすぐに騰越の城壁内部のものではないことが分かるであろう。それにもかかわらず、キャプションには、騰越のものと記されていることから、周辺のどこかということになる。写真の中の、木立の様子、遠くに見える山の

稜線、画面全体から受ける雰囲気から考えて、ここは傾斜した場所であることが分かる。**図３**の地図と見比べると、この写真は騰越城の南にそびえる来鳳山の周辺で、日本軍が砲台陣地を構築した、桜、松、梅の陣地か白塔高地ではないかと考えられる。写真の左上に覗いている山頂が、来鳳山ということになる。

中国軍兵士が鼻を覆っていることから考えると、死体の腐乱は相当に激しく進んでいるようである。死体の上に沢山の点のようなものが写っているのは、ハエであろう。手前の中国軍兵士はトビ口をもっており、これで引っかけて遺体を集めてきたとも考えられるが、日本軍が玉砕する前にそこに遺棄したものとも考えることができるし、地下壕に爆弾が落ちて生き埋めになったというのも可能性としては考えられる。しかし、バラバラになった遺体が露出していることや、写真のキャプションの中で、「不審に思って立ちすくむ中国兵士」とあること、またハエが一面に密集している状態を考えると、日本軍が立ち去った時から、そのままそこに遺棄されていたと考えるのが自然であろう。

米軍の写真部隊が付けたキャプションには、撮影の日付は1944年９月15日で「埋葬を行おうとする中国兵が、騰越で殺された女性を前に不審に思ってたたずんでいる所」（原文の注を参照、英文スペル判読の難しい所あり）と、「大部分の女性は日本軍基地にいた朝鮮の女性達である」という説明が付けられている。

来鳳山への攻撃の開始は６月27日で、戦闘の激化した総攻撃は７月10日、23日と26日に行われた。最後の総攻撃の際、城壁との連絡を絶たれそうになったので、守備隊は27日夕方に脱出し、以後その来鳳山陣地は放棄され、北に位置する騰越を取り囲む城壁戦、そして城壁が突破されてからは市街戦へと戦いの焦点は移った。恐らく写真の遺体は、来鳳山陣地脱出の際に遺棄され、１ヶ月半あまり放置された後、騰越城が最終的に陥落してから撮影されたものと考えられる。

以上、騰越の２枚の写真を見ながら分かるのは、それにしても何故このような最前線に慰安婦達を伴っていったのかということである。自由意志による契約を建前とし、運営と管理の責任は業者や慰安婦の方にあるという論理を現代の一部の論者が保持しようとしたとしても、雲南方面からの来襲が予想される最前線に慰安婦達をともない、戦闘行為にまで巻き込んでしまっているのでは、民間人への必要情報の提供、保護避難の確保に対する軍の責任は当然問われなければならない。しかし、こうした責任追及は、そもそもが無意味なことかもしれない。なぜなら、こうした状況を見れば、慰安婦はもはや単なる民間人などではなく、最前線の最も過酷な戦闘部隊の一部として完全に組み込まれてしまっていたことが明らかであるからである。あるいは玉砕の可能性が高いからこそ、逆に慰安婦の存在が必要であったとの推測さえ可能である。

民間の業者もしくは慰安婦が勝手に危険なところにやってきたというような論法を、あるいは誰かが唱えるかもしれない。しかし、必ず起こるとは言えないが十分な危険性を故意に隠蔽した責任は、少なくとも免れないであろう。また慰安婦を拉孟に連れていった女衒自身も、慰安婦達が「実質的には部隊付き」になっていたこと、それでいながら、慰安婦達を手榴弾で殺害されたことに対して、「悔しい思いをしている」と述べていることは先に引用した通りである。

当時雲南方面の防衛にあたっていた第56師団では、反攻開始の日付と場所を暗号電報の解読によって、反攻５日前に察知し、さらに絶対優勢の敵を怒江上流から下流にわたる広正面で迎撃するために、敵を怒江沿岸から内陸部に引き込んで戦う

写真F　騰越の守備兵玉砕後、中国軍の捕虜となった18名の慰安婦達。台湾人3人、朝鮮人2人、残りは日本人

「内線作戦」を前提に、籠城のための築城を進めていた[14]。こうした防衛作戦をとる以上、もし慰安婦が民間人であるというのなら、当然いち早く後方へ避難させるべきであったろう。慰安婦達をそのまま留め置いたということ自体に、もし慰安婦が民間人であるという形式をとるとすれば、重大な軍の責任が問われるであろう。百歩ゆずって、兵站や傷病看護、兵士の士気維持の必要等の「諸事情」によって、後方への民間人の搬送を慰安婦優先で行うわけにはいかなかったとの言い訳を仮に受け入れるにせよ、騰越城の南に位置するただの陣地に過ぎない場所にまで、慰安婦達を伴って行ったという点に関しては、いかなる正当化も行うことはできないであろう。戦史に残される勇猛な戦闘の背後に、軍規の弛緩はここまで進んでいたと言う外はあるまい。情報も与えられず最前線に留め置かれる慰安婦達の立場は圧倒的に脆弱であり、慰安婦達の自由意志という形の論理は、最前線に留め置かれた慰安婦達と軍の関係を律する原理となり得ない。戦闘部隊の一部としてはめ込まれた、文字どおり「奴隷」的な状態という以外にはないのではなかろうか。

騰越城陥落の際、多くの慰安婦達が犠牲になる中で、救出され中国軍の捕虜となった慰安婦達がいた。その写真を上に掲げる。

この**写真F**[15]は、元々２枚撮影されていたものを、筆者が左右に貼り合わせて一枚にしたものである。これは、中華民国第198師団第592団団長陶達綱によって保存され、その著書に掲載されたものである。その撮影されたときの状況が、陶達綱によって以下のように記されている。

友軍の53軍各部隊も勇敢に騰越城内に突入し、25日午後、騰越城内の日本軍は完全に消滅した。我が軍に捕獲された武器は、野砲・山砲・速射砲・軽重機関銃・歩兵銃・騎兵銃などおびただしい数に上った。捕虜の中には３人の女性がいた。年齢は20歳余りで、髪は短く刈り込んでおり、もはや人としての形を成していないほど、すさまじいばかりの惨澹たる形相[16]であった。

彼女達は飢えと緊張のためひどく疲労していおり、日本語交じりの台湾語をはなした。これは日本軍の中にいた、「営妓」であって、日本軍の獣性をあます所なく示すものである。話しかけてもその答えが分かるものが誰もいなかったので、私の目の前に３分弱ほど留め置いたが、すぐに後方へ送ることとした。彼女たちは我が軍が洞窟の中から見つけ出してきたものである。何と惨めで可憐なことであろう。彼女たちは日本軍によって脅迫され営妓になった台湾同胞の女性達であり、実に日本軍の行いは憎むべきもので、その悪辣さを物語るものであろう。

撮影されたのは、25日の午後であると、陶達綱は書いている。しかし、騰越の玉砕が14日であることから、それは誤りであろう。台湾で出された中華民国の記録『中華民国重要史料初編－対日抗戦時期第二編作戦経過』に収録されている、９月14日の戦闘報告の中でも、「軍官３員、士兵52名、営妓18名」[17]を捕虜にしたとあって、写真に付けられているキャプション、「台湾人3人、朝鮮人2人、残りは日本人、合計18名の営妓」の説明とぴったり一致していることから、25日の午後というのは、実は15日の誤りである。14日に捕虜になった慰安婦の中から、台湾人の3人が特別に、団長の前に引き出され、翌日15日に面会となったものと考えられる。

騰越城内での市街戦の中で、どのような状況で捕虜となったのかは、残念ながら管見の限り不明である。城内北東の最終陣地の角付近と思われるが、先に掲げた壁の脇に横たわる遺体と考え合わせると、最終突撃以前の段階で投降したのかもしれない。いずれにせよ、18名の生存者がいたことは幸いであった。彼女たちは、後方に送られたとのみ記されているが、その後の足取りは不明である。

写真G　カール・ヨネダの訊問を受けるキム。1944年8月3日

写真H　ミチナ陥落後に慰安婦となった女性達。正確に20名存在していること、一番右端の手前に写っている女性が、よく見ると年配の日本女性と考えられる。腹に帯を巻いていることに注目。1944年8月14日

5　ミチナ（中国名「蜜支那」）

ミチナへの侵攻が、５月17日から始まったときの全般的な戦局については、冒頭に述べたが、６月に入って以後ミチナは完全に孤立した。７月31日の夜、ついにミチナ守備隊は脱出を開始し、８月３日の夜までそれは続いた[18]。第56師団から派遣されていた水上少将には、個人としてミチナを死守すべしとする命令が与えられていたため、水上少将は、全軍に撤退を命じ、命令書にサインをした後、イラワジ川の中洲ノンタロウ島の東岸で、

８月１日に自決した。また、実質的な指揮権を掌握していた、元第18師団の丸山大佐は、８月３日の夜に対岸に脱出している[19]。ミチナ守備隊が最後に撤退した８月３日の夕刻、午後３時45分に連合軍はミチナを完全に手中にしたことを部隊内の兵士に発表した。兵士は祝賀の発砲をしながら大拍手でこれを迎えたという[20]。

しかし、３日の夜にも、日本軍の第２大隊、第３大隊は渡河を続けていた。最後に残されたこれらの大隊の兵士の大部分は、渡る船がないため置き去りにされた。守備兵力、1,200名の中で、無事対岸に脱出したのは、800名に過ぎず、187名が連合軍の捕虜になった[21]。

以上のような状況において、捕虜となった日本軍の中に、大量の朝鮮人慰安婦がいたことはよく知られており、政府発表資料はじめ、様々な資料の中にその写真が引用されている。しかし、諸資料を比較対照させて検討するうちに、重大な誤りが存在することが判明した。８月３日に捕虜になった朝鮮人の女性で、米軍兵士のインタビューを受けている姿が写真に撮影されたキムという名の朝鮮人の女性は、実は慰安婦ではなかったのである。その後に捕虜となった20名の朝鮮人慰安婦と共に以下に改めてその写真を掲げ、ミチナ陥落の８月３日から訊問記録が作成される９月までの1ヶ月間を中心に、写真に写った人物たちの歴史的背景をも交えつつ論証を進める。

この**写真G**[22]が、今まで長い間、朝鮮人慰安婦の写真とされてきたのは、当事者達の記録故である。しかし、実は当事者であっても機密保持ゆえに必要な情報が知らされていなかったため、当時のいいかげんな風評に基いた記録が、当事者の記録であるが故に事実として誤解されてしまったと考える。まず、その証言を行った人物２人の記録を相互に突き合わせながら、他の公文書及び、尋問記録と対照させてみよう。

まず最初に重大な記録を残しているのは、この写真の中で鉄兜をかぶって一番手前に写っている、OWIのカール・ヨネダ[23]である。ヨネダは、1933年からアメリカ共産党員として日本語機関紙『労働新聞』の主筆をしていた人物である。『労働新聞』は、片山潜が、1914年にアメリカに亡命して以後、アメリカ共産党設立に加わった時から、片山を初代主筆として発行されていた。ヨネダは、真珠湾攻撃後一旦は日系アメリカ人の収容所に入れられたものの、「ファシスト撲滅こそ唯一の救いの道であるとの考えにやがて到達し、ついにアメリカに忠誠を誓い、日系の将来のために米軍に志願するという運動」[24]を始めた。それが認められて、OWIの要員となったが、OWIは、Office of War Information（戦時情報局）の略語で、心理作戦のための宣伝ラジオ放送や、ビラの作成を任務としていた。そのヨネダの指導と指揮を行ったのが、ジョン・エマーソンであった。エマーソンは、1944年に延安を訪れ、「日本兵俘虜の再教育、日本人民解放連盟、八路軍その他の視察、宣伝文書の交換」などを行い、日本共産党の野坂参三とも会見している。エマーソンのもたらした野坂の情報は、戦後日本の占領軍による共産党政策に大きな影響を与えた。

また、延安の日本兵の中には、八路軍への参加声明書を発表し、「斯うして正義に目覚め、真の敵を知った我々は今日茲に、大いなる歓喜と希望にあふれつつ八路軍に正式参加を発表する」と唱えたものさえあった[25]。ヨネダは、こうしたエマーソンの延安での活動を模範としながら、レド米軍基地拘留所に収容されている30余名の日本兵の中から、「神経戦工作に好意をもち、提案その他の助力をなし得る五名の将兵を選ん」で、彼らの反応を確かめつつ、宣伝ビラの作成を行っていた。ミチナを脱出した丸山大佐に対して、慰安婦を置き去りにして逃げたのとの痛烈な批判をビラの上

から浴びせたのも、ヨネダである。

ヨネダの８月の日記から、写真のインタビューが行われた付近の記録を引用しよう[26]。

８月１－２日 「掃蕩戦だからミチナの完全占領は時間の問題だ」と一戦友が語る。それでも日本兵は強情に反撃してくる。敵の本部の塹壕に到達したとき、入り口で数名の病傷兵と、驚くなかれ二〇余名の朝鮮系慰安婦が中米兵士に取り囲まれている。「どうしたのか」と問うと、「俘虜を後送するためにMPと衛生兵を待っている。第一一四連隊長丸山房安大佐は、昨夜こっそりと壮健な部下をつれて逃げ出し、彼らや彼女らを置きっぱなしにした。日本の将校は臆病者だ」という。全くその通りだ。“ General who reaps glory while his 10,000 die. ”（一将功成りて万骨枯る）だ。

この中で、大切なポイントとなるのは、丸山大佐が逃げ出した翌日に、「二〇余名」の慰安婦が、日本軍本部の塹壕付近で中国と米国の兵士に取り囲まれていたと、ヨネダが証言していること、しかもそれが、８月１日、もしくは２日とされていることである。そもそも、丸山大佐が脱出したのは、３日の夜である。するとその翌日は、４日のはずである。確かに、日本軍の脱出は、７月31日の夜から始まっており、水上少将も1日に脱出したとされているから、当時の米軍情報では、丸山大佐の脱出を31日か、1日に誤解していたと解釈する他はない。しかし、いずれにしてもこの日時と場所は、慰安婦の尋問記録にある、10日に対岸でというものとは全く一致しなくなってしまう。

この個所に続くすぐ次の頁の同じ1日と2日の記録の中に、もう１ヶ所、慰安婦に関する以下の記述があり、それから判断するとヨネダの記録が20名の方に関しては、不確かなものであることは明らかである[27]。まずは、最初の1名に関する記述を中心に、引用を続ける。

本部に帰って、臨時拘留所に出かけると、多くの米軍兵隊が“ 涎を流す ”ような顔をして鉄条網によりかかっている。衛生兵が慰安婦の足や手にできている水虫に薬の手当てをしているのを見ていたのだ。MPの許可を得て中に入るや、一人のGIが私に、「何の特権があるのか」と詰問調に問う。「私は訊問官だ。君が日本語を話すことができれば入れるよ」と答えると、彼は無言で退却。どの女も、宣伝放送は塹壕の中にいたので聞いたことはないという。病傷兵の中で、聴いたが足が動かないためどうすることもできなかったという者あり。手榴弾を与えられたが使わなかったとのこと。大した反応はなく、レド基地に送ったあと、ゆっくり訊問することにする。八月三日木曜日朝雨・午後晴天 朝起きて「ミチナは陥落したか」と戦友に聞くと、「まだだ。今掃蕩戦中だ」と答える。

ここでのポイントは、８月３日起床する前日、つまり2日に、朝鮮人の女性に対して尋問を行ったと証言している点と、衛生兵が慰安婦の「足や手にできている水虫に薬の手当て」をしていたという点である。ヨネダは、５日朝、飛行機でレドに飛び、OWI本部に帰還した[28]。その後レドで綴られたはずの、「八月六ー三一日（OWIレド本部）」という日付の日記を残しているが、そこでは「八月三日、ミチナで捕まった朝鮮系慰安婦二一名に関すること」[29]と記しており、自分自身が、最初に１日もしくは2日と記した記録とさえ、以後の記録は一致していないこととなる。最初の１人に関する記述も曖昧であるということができよう。

しかし、とりあえず、ヨネダが21名の慰安婦が同時に8月3日に捕虜となったと認識している前提

で、次を参照することとしよう。

> 彼女たちは直ちにレド基地拘留所に空送され、皮膚病などの治療を受けた。そして訊問役は依地軍曹。彼は二週間にわたって彼女たちを一人づつ詳細に調べ、膨大な報告書を作って本部に提出し、「極秘」のスタンプがおされた。ところが、本部文官はおろか、基地司令部の将校まで「ちょっと読ませてくれ」と大評判になった。もしも印刷して発売したらベストセラーになり、依地は大金持ちになれるぞ、と冷やかす声があがった

「極秘」のスタンプが押されたことだけは、この証言からも、また実際の公文書からも確認される。恐らくヨネダ自身は、この尋問記録を読むことが出来ない立場にいたのではなかったろうか。だからこそ、「ベストセラー」云々の話を持ち出し悔しい気持ちを代弁すると同時に、自分がたった１人の朝鮮人女性をごく軽く尋問したに過ぎないのにもかかわらず、偶然写真が撮られていたことを幸いとして、さも自分がその中の重要な１人であったかのように記述を作り上げたとはいえないであろうか。

この不一致と謎に満ちたヨネダの証言を検証すべく、次にスティルウェルの情報担当将校として勤務していたチャン・ウォンロイ（Chan Won-Loy）という中国系アメリカ人の証言にあたってみよう。チャンは、**写真Ｈ**の中で、左側の一列に４人並んだ、米軍兵士の一番手前に写っている人物である。チャンは戦後も長くアメリカ陸軍に勤務し、退役後に当時の関係者や公文書の記録を元に、『ビルマー 語られざる物語』（日本語の書名は著者による直訳、原文は、“ Bruma The Untold Story ”）[30] という本を執筆している。

初めに、簡単なチャンの紹介をしよう。チャンの父は広東近くのSam Shui から19世紀末期にアメリカにわたった。1906年まで、サンフランシスコに住み、大地震をきっかけにそこを離れ、ノースベンドに引っ越し、結婚して雑貨店を開業した。チャン・ウォンロイは、そこで1914年に誕生している。４男２女の中で、少なくとも長男ではない。アメリカの小学校に行くが、父から広東語を家の中で話すようにいわれ、文化遺産としての千字文を強制され唱えながら店を手伝った。サンフランシスコの中学に行きつつ、夜間には中国語学校にも通った。その後再び故郷の、ノースベンドに帰り、高校を1931年に卒業して、1936年にスタンフォード大学に入学。クラスの中でただ１人の中国系アメリカ人だったという。経済学を学ぶ傍ら、予備役訓練課程をとり、1936年に陸軍野戦砲兵予備役となる。1937年の秋にスタンフォードの法律学校に入学。しかし兄が亡くなり、父の家業を手伝う。日中戦争が勃発、祖国中国救出のために貢献したいと考える。中国医療援助のためのアメリカビューローに志願。真珠湾攻撃後、第４軍の情報学校に入学し、1942年の初頭から日本情報専門家となるべく訓練を受ける。その頃から、チャーリーと呼ばれる。同年５月に組織が変わり、情報学校は軍事情報局語学学校（Millitary Intelligence Service Language School：MISLS）になる。そこを同年11月に卒業。読み書きのみならず、一般的な情報科目についても学ぶ。以上の訓練の上に、捕虜の尋問や拘留を担当する職務を、スティルウェル総司令官の下で担当することとなった。

チャンは、慰安婦が捕虜となった状況について以下のように記述している[31]。

> キャロル・ライト少佐と私は、我々が向かっていることを参謀長に伝え、全部隊に対して、捕虜の収容は飛行場において行うべしとする通告

を発する旨を伝えた。（中略）８月３日に捕らえられた捕虜の中で、最も関心と好奇心をかきたてたのは、キムと名乗った１人の若い朝鮮の女性であった。カチン族からなるモーリス部隊によって、彼女は１人の日本軍兵士と壕の中にいる所を捕らえられた。

キムは、「慰安婦」であったが、たった１枚の膝上までの衣服しか身につけていないことでいかにもその役割をしていたように見えた[32]。我々は、憲兵を配置して周りを固めさせたが、OWIのカール・ヨネダ准尉は、私に対し、簡単な質問をしてもいいか許可を求めてきた。我々は、正式の捕虜達への質問に忙殺されていたため許可を与えたが、カールが彼女に何と質問をし、彼女が何と答えたのかはついぞ一度も耳にしなかった。後になって、私は彼女にちょっとした定式通りの質問をしたが、彼女が価値ある情報を持っていないことはすぐに明らかとなった。次の日、我々はレドへと向かう飛行機に彼女を乗せ、捕虜と民間人の収容に責任を持つ英国当局に引き渡した。

この証言の中で、大切なのは、８月３日にキムという朝鮮人の女性が１人だけ捕らえられたこと、彼女を慰安婦であるとチャンが認定した根拠は、膝上までの衣服だけしか身につけていなかったことにすぎないことである。これをヨネダの証言と突き合わせて見ると、ヨネダが、「MPの許可を得て中に入るや」、「どの女も、宣伝放送は塹壕の中にいたので聞いたことはない」と、あたかも大勢の女がいたかのように書いているのは、明らかな記憶違いか、捏造であったことがわかる。公文書の記録を見ても、キムが捕虜となったのは、８月３日で、他の20名の朝鮮人慰安婦が捕虜となったのは、実は10日なのである。

ミチナには、63名の慰安婦がいたとされるが、20名の証言によると、7月31日に全員が対岸に脱出しており[33]、この３日の時点で、キムと一緒に他の大勢の慰安婦もいたとは考えられない。また、キムが脱出しそこねた慰安婦である可能性も、脱出したとされる63名が、慰安婦だけから構成されていたと記載する尋問記録[34]と、家族や従業員を含むとしている記録[35]が２つ存在することから、数の点だけから判断するとありえないことではない。しかし、ヨネダが言うように８月３日の時点で他に多くの女性がいたというのは誤りである。８月３日に捕虜となった朝鮮人の女性は、キムという１人にしかすぎなかったのである。たった一人だけというこの事実が、公文書としての尋問記録と対比させると、大きな意味をもって我々に迫ってくるのである。

このキムという女性が、本当に取り残されて脱出し損ねた慰安婦であったのかどうかを吟味するにあたって、決定的に重要なのは、８月３日にミチナで捕虜となった、「宮本キクエ」という日本名を名乗る朝鮮人女性看護婦の尋問記録が存在することである[36]。この記録には、宮本が「ミチナ陥落時に『朝鮮人慰安婦』と共に捕虜となる」（原文“in the company of “the Korean Comfort Girls” when Myitkyina fell”）と記されているが、そもそも捕虜となった日付は、「８月３日付近」と記され、尋問が行われたのは、８月８日と記されている。８月３日に捕虜となった朝鮮人女性は、たった１人だけであり、宮本が捕虜となった日付が、８月３日であることから、この**写真Ｇ**に写っている、「慰安婦」とされてきた女性は、実は宮本という日本名をもった朝鮮人看護婦であったことが判明する。尋問の内容は、それを更にはっきりと示してくれるものとなっているため、少し後に全文を紹介したい。

なぜ今までこのような基本的な事実に関して大きな誤解があったのであろうか。ヨネダやチャン

が、日本軍の中に慰安婦が存在しているという情報を聞いており、そために、最初に捕虜となったこの朝鮮人女性を慰安婦であると即断したこと、実際に捕虜を尋問した人物は別でしかも機密とされたためにその情報が伝わらなかったこと、この２つが要因であろう。実際ヨネダは当然としても、チャンもこの尋問記録を見ていないという証拠が著書から判明する。チャンは、ミチナ全体で何人の慰安婦がいたのかは不明であるが、少なくとも後で捕虜になった20人と最初の1人と合わせて21人はいたと書いているからである[37]。ここから、慰安婦達が語った尋問記録にある63名という数をチャンが知らないのは明らかであり、尋問記録は少なくともチャンの著書執筆の時点では参照されていない。いずれにせよ、機密とされた公文書に確認することなく当事者の回想が執筆されたため、それは当事者の記憶故に重みを持ち、それが今に至るまで、資料の価値を歪めてきてしまったのである。

この結論に立って、改めて**写真Ｇ**の写真資料を吟味してみよう。そもそものキャプションには、「日本語通訳であるサンフランシスコのカール・ヨネダ准尉が、空港にある憲兵の営倉において、日本人の『慰安婦』に質問をする。傍らにマサチューセッツ・フランクリン出身のエドワード・セイントジョンⅡ世が、背後で警備にあたる。キムはミチナにおける看護補助として勤務した」[38]と述べられていた。確かにここでも「慰安婦」という言葉は使われているが、その一方で「看護補助」（原文は、nurses aid）という言葉が使われており、素直にそれを解釈すればキムは、看護婦なのであり、恐らくそれはキム自身が、ヨネダに対して最初に回答した言葉を元にしているのであろう。ヨネダやチャンは、慰安婦が時には看護業務もこなすと知っていたがために、それをそのまま信用せずに、朝鮮人の女性であることから、「慰安婦」であると即断したのだと考えられる。実際写真を見ると、キムの着ている衣服は、看護婦の制服ではないだろうか。ワンピースで、丈が膝の上というのもうなずける。また、ヨネダが最初にキムを見つけたとき、足と手に水虫が出来ており、それを看護兵が治療していたと証言していることも、キムが看護業務に長期間従事してきた傍証となる。看護婦だからこそ、水虫になるのであり、慰安婦が水虫になるというのも奇妙ではなかろうか。

また、ヨネダとキムとの間に、写っている日本人の兵士の存在が今まで無視されてきたが、これはヨネダの通訳ではない。そもそも、ヨネダの日本語能力は、戦争前に広島に留学していたことから見てほぼ完璧である。兵士の着ている衣服を見れば、それが明らかに日本軍兵士のものであることが分かる。もしも、ヨネダと共に、先に捕虜となっていた日本人元兵士が同行したとしても、ヨネダと同じ方向に座ったであろうし、制服も米軍のものに着替えていたに違いない。男性の兵士と並んで写っているということは、この営倉が非常用のものに過ぎず、写真に写っていない営倉内の空間に一緒に収容されていたのは、男性兵士であったであろうことが分かる。キムは、次の日に収容施設の整ったレドに送られていることから、恐らくこの８月３日を最後に、男性兵士と話をする機会は与えられなかったに違いない。もしかするとこの男性は、カチン族兵士に捕らえられたときに一緒にいた、兵士かもしれないし、さらにそれは、次に掲げる宮本（改めキム）の尋問記録の中に出てくる、「Tushida」という名の兵士とも同一人物であった可能性があるが、この点に関しては、明確な証拠は何もない。ともかく、宮本、改めキムの尋問記録の紹介を次に行うこととしよう。キムがみせかけだけの看護婦で、実は慰安婦であったのか、それとも本当の看護婦であったのかが以

下の尋問記録によって更にはっきりする。

尋問記録の冒頭に付けられた基礎データによると、宮本キクエ（キム）は捕虜になった当時の年齢が28歳、満州国にて出生し、６年間小学校に通った後、朝鮮の平壌で１年間看護学校に通い、1942年８月第２野戦病院に所属してビルマに到着、1944年の８月３日に捕虜になった。平壌には母親と姉妹が居り、結婚はしていない。尋問は、８月８日「戦闘司令部」で、「アクネ・ケンジロウ」によって行われた。以下、尋問記録のほぼ全文を訳出するが、括弧の付されているところは、原文でも宮本自身の言葉を示す引用符がつけられている。

捕獲時の状況（下線部原文）：ミチナ陥落時に、「朝鮮人慰安婦」と共に捕虜となる。

評価：捕虜から得られた最も貴重な情報は、日本人による朝鮮人差別についてのものである。彼女は、連合軍の捕虜になったことを幸いと考えている。というのも、日本人の彼女に対する取り扱いよりも、ここでのそれのほうが良いと分かったからだ。彼女は病院勤務開始以来、軍事に関する興味深い情報を何度か聞いているため、大抵の兵士が知らないような情報も数多く提供してくれた。例えば、大東亜決戦機として知られている新型の戦闘機についてである。この飛行機は現在日本が有する最高の性能をもったものとして知られている。

情報と宣伝

ニュース：「新聞を読む時間も見つけてはいましたが、睡眠をとることも何とかしなくてはなりませんでした。」

リーフレット（ビラ）：「私は、『出てきなさい。もう大勢のお仲間達が我々の所にいて、よい待遇を受けていますから』というビラを読んだことがあります。フーコン峡谷においては、55・56師団の壊滅を伝えるビラを読みました。菊兵団（18師団）の多くの兵士達が、ビラがとてもよく書けていて、それからすると、敵の捕虜になった我軍の兵士が書いているんだろうな、と口々に話しているのを聞いたことがあります。でも、そんなことにはあまり関心がありませんでした。誰が朝鮮を掌握しようと問題じゃないから。今まで朝鮮人はひどすぎる扱いを受けてきたので、どこか他所の国が朝鮮を掌握することになったとしたって、今より悪いなんてことにはならないと思います。朝鮮ではたくさんの反日運動が存在していて、私もその中の一グループといっしょにどこかに隠れてしまおうと思ったこともありました。しかし、母がその計画を知って、私が殺されたり刑務所に入れられるんじゃないかと、とても心配したので、この反日団体と行動を共にすることができませんでした。この団体は朝鮮の周りのどこかに潜んでいると私は信じています。」

戦闘状況

医療看護：軍医達は彼女を犬のように扱い、牛馬の如く酷使したと、この捕虜は主張する。「一緒にいた日本人の看護婦達は、安全のため後方に送られたというのに、軍医達は私に最後までここに踏み留まって兵士と一緒に死ねと命令しました。またそれまでにも、私がマラリアにかかってベッドに横たわっていたとき、他の女の子が軍医に薬と注射をお願いすると、軍医は私が仮病を使って仕事をなまけようとしていると言って、水を浴びせて私をたたき起こしました。私は悪寒と高熱にもかかわらず働かざるを得ませんでした。他の看護婦達が普通の看護婦の仕事をしているのに、私の方は汚れた衣服やガーゼを洗う汚い仕事をしなければなりませ

んでしたし、給与にも差別がありました。日本人の看護婦が150円貰っているのに、私は100円足らずでした。他の看護婦達が全部後方に送られたというのに私はもっとひどく働かなければならなかったのです。軍医でさえ眠る時間は確保されているというのに、私は仕事に追われて３日も働きどおしでした。もし、ちょっとでも休もうものなら、すぐ軍医にたたき起こされたでしょう。ある時私は気が変になりかけて、ここを抜け出して敵の捕虜になってやると言ったことがありました。軍医は勝手にしろと言うなり、もし敵がおまえを捕まえれば、敵はおまえを強姦して殺すだけだと言ったんです。捕まったとき私が怖がったのはそれも１つの理由でした。しかし実際は何も起きなかったどころか、非常によい待遇を受けてます。他の日本人は皆１年２度のボーナスが支給されましたけれど、しばらくの間、私にはそれがありませんでした。私が朝鮮人であるというだけの理由で差別したんです。」

「兵士達は私が朝鮮人であるからといって、よく私をからかいました。また、看護をしている最中に戦争の話を聞こうとすると、兵士達はとても怒ったものです。それは女が考えるようなものではないといって、私を追い払いました。聞いたことがないようなニュースがあると、私はよくそれが何なのか聞かせてくれとせがみましたが、いつもひどく叱られました。」

航空支援：（省略）

一般的考え

日本と朝鮮：「日本は持たざる国なので、もし敵のほうから最初に攻めてきたら、日本は手ひどい損害を被ったでしょう。だから日本は最初に満州に攻め入って、戦争を始めるのに必要な資源を押え、次に中国と戦って準備して、いよいよ準備が整うと、アメリカに攻撃を仕掛けたんだと思います。もし日本の方から戦いを欲しなかったら、戦争は避けられたと思います。もし日本が勝ったら、朝鮮や他の国はますますひどいこととなるでしょうね。日本人はそんな人間達ですから。もし日本が勝てば、日本人はそれを見せびらかすようにして、ますます思いあがると思います。私は日本なんか徹底的に負けてしまえばいいんだと思っていますわ。さっきもお話したように朝鮮を解放しようと、隙をうかがって偉大な人たちがどこかに隠れているんですから。今になってみて、私も一緒に仲間に入るんだったなって思っています。朝鮮人の警官は日本人の警官よりももっと始末に負えません。日本人と同じになったといって鼻に掛けるし、ひどいのになると日本への忠誠心を見せつけようとする方さえいる始末。人を大事に扱ったらいいのに、することはその逆です。日本人のためにしばらく働くと、人は皆な、同じような人間か、もっとひどいやからになってしまうみたいです。私は日本が負けるって分かっています。ミチナでだって最初は勝つといったのに、どんなことになったか見ればわかります。でも、戦争が長引けば長引くほど朝鮮人はもっときつい仕事をしなければならなくなりますね。朝鮮人は食料がちょっとしかもらえなくて、着るものもあんまりないし、食料作りにみんな駆り出されているんです。私の母もよく半狂乱になってしまう程、ひどい扱いに抗議したものです。でも、もしそれが他所の人にばれたら、おそらく刑務所送りだったと思います。先日、ここの捕虜収容所にいるTushida（筆者注：Tuchidaの誤りか）中尉が、私に向かって、他の兵は全員ミチナから無事に脱出したのかって聞いてきたので、私は、もう皆な捕まってしまって、す

ぐここにやってきますよと答えてやったんです。彼は私が言ってやったことにとてもとても驚いていましたね。」

ドイツ：「日本はドイツの支援無しには、この戦争に勝てる見込みはないでしょう。もうドイツは、ヨーロッパ戦線で負ける一方ですから、こっちの方で日本が勝つ見込みはないと思います。」

米国・英国・中国：「アメリカ人は100%日本人よりもマシです。もしアメリカ人が捕虜になったら日本からこんなによい待遇は得られやしない。でも実を言うと、日本軍の捕虜になったアメリカ人やイギリス人の待遇の方が、中国人よりもマシになってます。中国兵が捕虜になったら殺されてしまいます。この目で見たことはありませんが、何度もそんな風にしてやるんだっていう話を耳にしたことがありました。この前、白人が病院に連れられてこられた時、軍医は出来る限り最高の待遇を与えていました。私も中国人は好きじゃない。非人間的で、遠慮がなくって、無作法だから。朝鮮人にとっては、そんな感じが普通だと思います。満州にいたときから、私は中国人が好きじゃなかった。」

待遇：「ここで受けている待遇は、今までのどんな待遇よりも上等です。とても自分が捕虜だなんて思えない。確かに捕虜だけれど、日本の奴等と一緒の時よりは、はるかにマシだと思います。」

日本への帰国：「日本に帰ることは関心がありません。その代わりここで結婚して、ここに住み着きたいと思っています。でももし命令なら仕方なく帰るけれど、そうでないならいやです。」

全体を通じて、３ヶ月にわたる戦闘と、２年に及ぶ最前線勤務によって、すっかりすさんだ心理状態にキムが陥っており、朝鮮人に対する日本軍兵士や軍医達の差別が、更にそれに拍車を掛けていたことが判明するであろう。また、看護婦であるという証言を裏付ける細かい給与、作業内容に関する証言があることも確認されるだろう。

細かい点としては、以下のような事実が分かる。第１に、日本人の看護婦達は、先に避難させられたのに、キムだけは最後まで残れと命令されたことである。しかし、実はキムはこの命令によって生き残ることが出来た。日本人看護婦を含んだであろう「婦女子60名」中、一部は５月末に脱出し、その残りは７月末に脱出したが、その際に使われたいかだのほとんどは敵に発見され、乗組員は捕虜になるか射殺された[39)]。またイラワジ川の下流のバーモ北方には滝と急流があり、そもそもいかだでの航行は不可能であり、バーモまで無事に到着したのは、水上少将の副官１人だけであった。しかも途中現地人の船を運良く奪うことに成功したからこそ可能となったに過ぎない。

第２に、キムがヨネダから尋問された時、なぜ慰安婦であるというような誤解を与えてしまうほど、はっきり応えなかったのかがわかる。それは、上司の軍医から捕まったら「敵はおまえを強姦して殺すだけだ」と脅かされていて、最初捕虜となったとき、ひどくおびえていたためであった。

第３には、写真に写っている日本兵が実はTushida中尉なのではないかということが推測される。中尉から、ミチナの将兵が脱出したかという質問を受け、それに対して答えていることから見ると、ミチナでこの会話が行われたことは明らかだ。キムが翌日にはレドに送られていることを見ると、この中尉とは写真に写っている日本兵である公算が高い。

第４に、日本の戦争突入理由、ドイツに頼らざるを得ない戦争の帰趨、朝鮮の独立運動への展望、国際政治観などを、はっきりと答えているところ

をみると、教育をほとんど受けていない子供っぽい慰安婦という感じはしない。基礎的な教育を受けていればこそ、こうした関心と自分なりの世界観を有し、モノを考えていたといえよう。実態は慰安婦であるが、恐れて自分は看護婦であると身分を偽った、というような説明が成り立たないことが、この証言から分かるであろう。

では、次にキムに遅れて１週間して捕虜となった朝鮮人慰安婦20名について、何故20名なのか、それ以外の慰安婦達はどこへ行ってしまったのかを中心に論じよう。

現在まで公表されてきた写真では、右端の方が暗くなってみえにくくなっていたが、**写真Ｈ**は、ネガからプリントしたものであるため、極めて鮮明である。右端の一番手前に座っている女性をご覧頂きたい。かなり年配で日本人の風貌をしており、更に腹に帯のようなものを巻きつけていることが分かる。恐らく、これが「キタムラトミコ」という38歳の日本女性で、慰安婦を統括してきた女衒「キタムラエイブン」の妻であると考えられる[40]。また写真に映し出されている女性を数え上げてみると、丁度20名である。キタムラトミコを入れて21人となるはずであるが、1名を除いてほぼ全員が写っている。この中のどの女性を見ても、**写真Ｇ**に写っているキムという名の髪の長い女性はいないことが確認される。服装を見ても、脱出用に身支度はしたであろうが、基本的には日常の服装のままであり、その服装にはキムの着ていたような、膝上のワンピースはない。

何故、20名なのかという点であるが、尋問記録によると、そもそもミチナにいた慰安婦は63名で、３ヶ所の慰安所に分かれて生活していた。「キョウエイ」（これはかつて「丸山ハウス」と呼ばれた）に22名の朝鮮人女性、「キンスイ」に20名の朝鮮人女性、「モモヤ」に21名の中国人女性がいた[41]。捕虜となった20名は、「キョウエイ」にいた慰安婦達で、その主人キタムラが1942年７月に朝鮮で、陸軍司令部の「示唆」を内々に受けつつも、表面上は「申請」という形にして、慰安婦を集める許可を得て、ビルマへと連れてきたものである[42]。元々いた22名が、20名となったのは、全体の慰安婦63名中の、移動途中に死亡した4名と射殺された２名、合計6名の中に、キョウエイの慰安婦2名が含まれていたためと考えられる。８月７日の戦闘でバラバラとなった後、「モモヤ」にいた中国人慰安婦21名も１人減って、20名となったが、彼女たちは自分達で自発的に中国軍に投降した。

残されたのは、計算上せいぜい17名となった「キンスイ」の慰安婦達であるが、彼女たちはバーモへと敗走するミチナ守備隊の後を追った。この一行は、記録には、「およそ20名」と記載され、８月19日に、後に捕虜となった日本兵によっても、その姿が目撃されている。「キョウエイ」の慰安婦達が８月10日に捕虜となった後も、「キンスイ」の慰安婦たちは、必死にミチナ守備隊の後を追っていったのである[43]。この中の少なくとも２人は、バーモ近郊まで守備隊と行動を共にしている。第６中隊の森崎善喜の証言には以下のようにある[44]。

> 暗くなりかけた激しい雨の日だった。「兵隊さん、しっかりしろよ、バーモはもうすぐだよ」と朝鮮人の慰安婦から声をかけられた。彼女らも裸で竹の杖をついて痛々しい。脱出以来、筍で生きてきたのだ。当時数十名いた慰安婦も今はたった２名になっていた。１人は中年でもう１人は若かった。彼女の話によれば、丸山連隊長は、激戦の最中に慰安婦を自分の壕に呼び寄せていたと聞かされ、兵隊を牛馬のごとく叱咤する高級将校が何たることだと思った。ある日私が水を汲みに行く途中であった。カチン族の空き家の横で、顔一面髭の小肥りの男が、他の

男を青竹で打ちのめしているのに出逢った。髭の男は丸山連隊長で、投打されているのはミッチナー駐在の一憲兵であった。理由は、連隊長愛妾の慰安婦を見捨ててきたことに激怒しての行為であった。私は真相を知り唖然とし、そして怒りを覚えたのである。

以上の回想には、森崎がかつて目撃した所の、青竹で憲兵を打ち据える丸山連隊長の姿が、丸山連隊長の不謹慎な行為に関する慰安婦の証言によってはっきりと意味を成し、その意味を悟ったことで、激しく怒りを感じた瞬間の記憶が綴られている。丸山が「愛妾」としていたのは、河（ハ）（日本名、河原スミコ）という21歳の女性であったが、河自身はアメリカ側の尋問に対して、この丸山の不謹慎な行動は単なる噂として否定している[45]。いずれにしても、慰安婦達の「贅沢ともいえる」「暮らしぶり」は、実は「キョウエイ」という丸山が特に目を懸けていた慰安婦のいる所だけであったのではないかという疑いが生まれる。他の慰安所の慰安婦は、かなり厳しい格差のある状況にあったため、嫉妬さえ生まれていて、それが「キンスイ」の慰安婦をしてこうした証言を森崎に語らせたのではないかとも考えられる。この最後の証言通り丸山が爆撃下に慰安婦を壕に呼んでいたとすれば、もしくは呼ばないまでも、特別に可愛がっていた慰安婦のいる慰安所に特別な待遇を与えていたという私の解釈が正しいとすれば、軍規の弛緩は、騰越のみならず、ミチナにおいても極まっていたというべきである。

次に、生活環境が本当に贅沢なものであったのかどうか、ビルマ族のミチナ地区行政副長官の証言[46]から検討しよう。

ウキンナウン（U KIN NAUNG）は、日本軍占領下におけるミチナ地区の行政副長官で、タウレオ（TAW LEO）はその秘書官であった。彼らに対する尋問は、OWIの心理戦争班のスタッフであるビルフレッド・クリットル隊員によって、アレックス・ヨリチを伴い、1944年６月７日から９日にかけて行われた。ヨリチは、後に「キョウエイ」の20名の慰安婦の尋問記録を作成する人物である。現地の行政副長官の証言が行われた６月上旬は、圧倒的な連合軍の優勢が確定し、ミチナの戦いが本格化する時期であるので、戦いに際して心理戦のための情報を得る目的であったのであろう。

この証言によると、そもそもミチナは、ビルマの典型的な普通の街ではない。主要な民族は、シャン族系のビルマ人、インド人、中国人であるが、付近の村はシャン族とカチン族によって占められていて、純粋なビルマ人が多数を占めたことはそれまで一度もないという。日本軍がミチナを占領した際には、「人食い鬼が来る」といってほとんどの人が逃げ出したが、暫くすると人々は帰ってくるようになった。しかし、女性に対する暴行や強姦はなかった。両者共に、日本軍の占領期間を通じて、１件もそのような事件があったと聞いたことはないと証言している。確かにかなりの略奪は行われたが、それもすぐに取り締まられるようになり、ビルマ独立軍兵士の行った略奪も同様に取り締まりの対象になったという。またイギリス系インド人難民は、収容施設に入れられたものの、よい待遇を受けたという。彼らには肉料理も盛り込んだ配給制度が敷かれた。そうした状況の中、日本軍の将官は、イギリス系インド人の女性達に非常に魅了されるようになり、彼女たちのために社交クラブを作ったという。しかし、出席は義務とはされず、実際そこに出席した女性に乱暴しようというような傾向もなかったので、将官と女性との間には、数多くの交流が結果として生まれたとも述べられている。そんな風にして、占領第１年目は協力的な雰囲気の下に過ぎ去り、イギリス

の軍や民間人から徴発した物資により衣服や食糧の供給もあり、空襲もなかった[47]。日本軍の将兵が村の子供たちと一緒に遊んだりするなど、子供たちに向けられた将兵の愛情は特に印象深かったとも語っている。兵士の平均年齢は25歳であり、故郷の弟、妹達を思い出していたことであろう。

慰安婦達が、かなり贅沢とも思える暮らしをしたと語っているのは、恐らくこうした占領１年目の1942年、朝鮮から到着直後のことではなかったであろうか。運動会がおこなわれたのも、こうしたシャン系ビルマ族の子供たちのためだったとさえいえるかもしれない。

しかし、こうしたのどかな風景は、戦争が長期化するにつれて大きく変わっていった。経済状態についてみると、初期にはヨーロッパ人から徴発したシャツや下着類が安いレートで売られていたり、食糧もたくさんあったが、戦争が長期化するにつれ日用品は底をついた。新しい製品は、日本から供給されるといっていたにもかかわらず、ミチナには全くやってこなかった。物価は上昇に転じ、1943年10月には、うなぎ上りであった。ごく少量の物資がラングーンに着いたというが、ミチナでは配給切符を持っていても何も買えなかったという。また日本軍は軍票を大量に発行したことも、インフレに拍車を掛けた。賢明なものは、金や宝石を秘匿するようになったという。

また、1943年の米穀の収穫量は、通常の５分の１に激減した。その主な原因は、作付け時に労働力を徴発されたこと、耕作用の水牛が疫病の流行で死亡したり荷物運搬用に徴発されてしまったためである。インパール作戦では、水牛を連れて荷物を運ばせ山を登り、逐次食料にしていくという、「バーベキュー作戦」が牟田口司令官によって計画され、しかしながら、水牛が山を登れないため無残な失敗に終わったことは有名である。こうした水牛徴発の影響はビルマの農村に穀物高の激減となって降りかかっていたのである。十分な食糧の供給はありえない状況であった。また、南部の方では、かなり収穫の挙がったところもあったが、ミチナまで運ぶための鉄道が不通となっていたため、ミチナにおけるこの年の穀物備蓄は、連合軍の爆撃もあって1944年春には既に底をついていたという。また、芋の作付けに関しても、通常はシャン族の部落から持ち込まれる種芋が、1944年は来なかったため、前年の芋を種芋に使わざるをえず、そのためにごく少量の収穫しか挙げ得ていないという。日本の若い兵士達のほとんども、その頃は戦争に疲れているように見え、口に出して故郷に帰りたいと語るものまで出てきたという。

連合軍による爆撃は、1943年の11月から開始されており、これが経済的混乱に更に拍車を掛け、兵士達のモラルの低下にもつながっていた。最初のうち、ビルマ人が防空壕に逃げ込むのを馬鹿にしていた日本の兵士も、爆撃が激化するにつれて一緒に駆け込むようになった。また、ビルマ人の精神的拠り所である、釈迦の骨を収めたパゴタにも日本軍の対空砲が設置されるようになった。

こうした状況では、慰安婦達が初期と同じ贅沢な暮らしを続けることが出来たとは考えにくい。もしも仮に、一部の慰安婦が贅沢な暮らしを依然続けられたとしたら、それこそが問題であったといわざるを得ない。丸山大佐の影がちらつく。物資の全体量が欠乏し、配給制が敷かれている所では、軍票自体があまり意味を持たないはずだからである。

しかしながら、「キョウエイ」の慰安婦達20人が、贅沢な暮らしをしていたと米軍に対して証言しているのは、どういう訳であろうか。理由としては、丸山大佐の保護によって特定の慰安婦が特別待遇を与えられていた、もしくはキタムラ夫妻から懇願されて彼らに有利な証言をした[48]とも考えられるが、私は彼女達自身が自己に対する何ら

かのプライドを維持し自分を支えていく上で、かつて到着した直後に少し体験できたかもしれない楽な暮らしの記憶が必要とされていたという説を取りたい[49]。彼女たちは、恐らく朝鮮においてさえ、今まで一度も、いわゆる贅沢な暮らしをしたことがなかったのではなかろうか。朝鮮においても惨めで貧困に追いたてられるような暮らしを長く続けてきたからこそ、到着直後に、わずかばかり享受し得た楽な暮らしぶりによって、初めて自己に対するプライドのようなものが、周囲よりも「贅沢」な暮らしができる自分として、生まれたのではないかと考える。そうした記憶が、性的な奉仕を続けさせられる毎日の生活の中で、自分を支える唯一の心理的支えとなっていったのではなかろうか。実際、ミチナにおいては、軍票による代金の支払いは行われており、キタムラトミコが写真でも見られるように腹に巻いていた帯の中には、その軍票がしまい込まれていた。それは、戦争が激化した状況においてはほとんど使えないものであったろうが、いつか再び贅沢な暮らしを可能とさせてくれるものとして大切にされていたのであろう。

その帯にしまわれた軍票について、チャンは以下のように描写している[50]。チャンと最初に面会したとき、慰安婦全員がヒステリックになって尋ねたのは、今後の行き先であった。インドの収容所に送られ、朝鮮にやがては帰れることが分かると、次の質問は軍票が使えるかどうかに移った。キタムラトミコが帯を解き、全員から預かった軍票を前に並べてみせたのに対し、チャンの部下のヒラバヤシ・グラントはチャンの内意を受け、巧みな日本語で、そのお金はもう使えないことを、心から誠意を込めて紳士的に説明した。それに対して、キタムラは全くその話を信じようともせず、不信感を持って見つめ返し、言葉もなく床上の軍票の山を指差しつつ、首を前後に振ってみせるだけであった。それを見た、ヒラバヤシは、恐らくあまりに気の毒に思ったのであろう。中国人やアメリカ人のコレクター用に、軍票の束を少し、タバコやキャンディーや食料と交換してあげることを申し出た。しかし、この申し出は、キタムラにとっては、日本軍同様のお定まりのピンはねがアメリカ式になったものとして受け取られ、それをしてあげれば残りのお金の保持を保証してもらえるものだと信じて交換に応じた。こうしたやり取りを、周りの朝鮮人の慰安婦は固唾を飲んで見守っていた。彼女たちは、後でキタムラからアメリカ式の「ピンはね」についての説明と、ピンはねされはしたが、残りのお金はもう大丈夫だとの説明を受け、あるものは安堵して笑い、あるものは泣き出してしまったという。こうしたやり取りを見ながら、チャンはこの無価値な軍票を稼ぐためどれほどの苦労をこの女の子達が堪え忍んできたのかに思いを馳せ、胸が締め付けられるようであったという[51]。

これ以後は余談となるが、ともかく、そうしたやり取りによって、日本語情報を担当する日本系や中国系のアメリカ人と、朝鮮人慰安婦達との交流は深まり、慰安婦達がいよいよインドのレドへと出発する最後のお別れの場面では、日系アメリカ人はギターを持ち出して、懐かしいアメリカや日本やハワイの歌を歌い、慰安婦達は、若者への恋心をテーマとする朝鮮の愛の歌、アリランを歌ってそれに応えたという。アリランは、本来は愛の歌ではなく、景福宮造営のための木材を運ぶ農民達が峠を越えるときの辛さを歌ったものだが、このような場面では、お別れにふさわしい愛の歌として解釈されていた。そのようなある程度社会化された男女間の親密な感情の交歓こそ、当時の彼女たちに最も必要とされていたものではなかったろうか[52]。

チャンが最初に慰安婦と対面したとき、慰安婦

達の反応は様々で、ある者は反抗的、ある者は恐れと不安の態度をとったというから[53]、贅沢な暮らしという評価も、個々の慰安婦ごと、まちまちだったにちがいない。個人の内面は、いくら他人が推量を巡らそうと、もとより推し量れるものではない。これは、ミチナの経済的状態に対する、ビルマ人の証言と、彼女たちの尋問記録を対比させることで、私自身の心に浮かび上がってきた、一つの理解に過ぎない。

6　まとめ

以上、日本軍が最後まで抵抗を続け玉砕した、拉孟・騰越・ミチナの順に、各地の慰安婦達がいかに戦闘に巻き込まれ、死亡し、捕虜となっていったのかを、戦局に即しながら、資料的な制約はあるものの努めてダイナミックな変化の文脈の中で論じた。

そもそも、本論で言及した慰安婦達の全ては、1942年の６月から７月という同じ時期に朝鮮から、軍の示唆を受け女性を集めた女衒によってビルマに連れられてきたものである。ラングーン到着後に、慰安婦達は将校のくじ引きによって、配属される部隊が決められたという[54]。くじ一つでいかに千差万別の境遇の中に置かれることとなったのかは、本論のみならず、ミチナの慰安婦達と同じ船に同乗し、海沿いの国境線守備担当の第55師団に配属された、文玉珠の優れた語りの記録と共に対照させることでよりはっきりするであろう。

本論を通じて、静態的な制度や統計分析の手法では見ることができない、慰安婦制度そのものの特異な性格が、最前線に巻き込まれた地域での戦況の中で、ほんのわずかながらでも浮きぼりにできたのではないかと考える。そもそも、公娼制度とは、前借金の返済を売春によって返済するという契約を、業者との間で対等に自らの意志で交わした女性として娼妓を位置付け、前借金はあっても業者による身体に対する強制性を伴わない売春斡旋は婦女売買とは認めないとする見解から政府が公認したものであり、その延長線上に慰安婦制度が形成されたことは確かであろう。しかし、それは単なる拡大ではない[55]。それを論じようと、「強制」性の有無をめぐって、今まで様々な論争が展開されてきたわけである。しかし、いかなる過程を経て慰安婦にされたのかという出発点における強制性ばかりではなく、慰安婦達が戦場において、いかなる境遇に置かれ、その境遇は身体に対する拘束・強制性の基準から見て、どのように位置付けられるのかという視点で、前線や後方の各部隊における平時の処遇や戦時への移行も大いに研究されるべきである。その際には、現地の最末端の守備隊レベル、師団司令部レベル、方面軍レベルを分け、いかなる命令が発せられていたのか、それはいかに実行、もしくは無視されたのかを検討する必要があろう。こうした点を分析するために必要な歴史的材料は限られているが、慰安婦の生と死の瞬間を語る写真が撮影されており、それに巡り合うことができたことは不幸中の幸いともいえるのかもしれない。

私としては更に一歩を進めて、個人の自由意志とは、総動員体制下国民徴用を必然化した統制型国家への変質とは、そして日本帝国憲法下の国民とは、植民地とは、というようなテーマの追求と併行して、より構造的な分析によって、慰安婦の方々を歴史の中に位置付けていきたいと考える。いずれにせよ、慰安婦に対する動態的かつ構造的な分析を通じて、近代から現代へと転換する東アジアの国際関係史が、より豊富な社会的広がりをもち、国際的な相互理解を促進するものへと生まれ変わってくれることを期待して止まない。

注

(1) 当事者の記憶との乖離を埋めることができなかったのは、そのような分析手法にも問題があったといえるかもしれない。

(2) 英語名は「Myitkyina」、中国名は「蜜支那」、よって日本側では「ミイトキーナ」或いは「ミチナ」と２通りで呼ばれた。ビルマ語の発音に近いミチナを使うこととする。

(3) RG111 SC230147（BOX85）（National ArchiveⅡ Washington D.C.）

CBI-44-29969 3 SEPT.1944 LOT #10158..写真裏面のキャプション原文は以下の通り。

PHOTOG:PVT. HATFIELD; FOUR JAP GIRLS TAKEN PRISONER BY TROOPS OF CHINESE 8TH ARMY AT VILLAGE ON SUNG SHAN HILL ON THE BURMA ROAD WHEN JAP SOLDIERS WERE KILLED OR DRIVEN FROM VILLAGE. CHINESE SOLDIERS GUARDING GIRLS.

(4) RG338 Records of Allied and US Army commands, CBI Theater of Operation RG338-290-D-5-3 Public relation Section Box （Old System） No. 791-792 : *Roundup*（日時不明1944年11月）.『ラウンドアップ』は、ＣＢＩ（中国－ビルマ－インド）方面に駐留するアメリカ軍が出していた週刊新聞。The CBI Roundup is a weekly newspaper published by and for the men of the united states Army Forces in China, Burma and India from news and pictures supplied by the staff members, soldier correspondents the United press and the war department. この記事は、同資料を切石博子調査員の協力の下で、筆者と秦郁彦日本大学教授が閲覧している最中に、同教授が発見されたものである。また、ワシントンの資料館で長期間独自に資料調査を進めていらっしゃる方善柱杏林大学教授も、既にこの資料を発見しておられ、当地で面会した際にこの資料の存在について御教授頂いた。関係の方々、特に粘り強く資料閲覧を続けられ、快く資料の提供に応じて下さった秦教授には改めて感謝申し上げたい。

(5) 松山が９月７日午後４時に完全に中国第８軍主力によって制圧された際に、「敵軍九名、内有中尉一員、此外並俘敵婦五名」を「俘虜」にしたとある。「遠征軍司令長官衛立煌自保山報告攻占松山及俘獲與我軍傷亡情形電－民国三十三年九月七日」『中華民国重要史料初編－対日抗戦時期第二編 作戦経過』中国国民党中央委員会党史委員会、1981年、505頁。この史料の存在と閲覧に関しては、台北にある中央研究院近代史研究所の研究員、朱浤源氏と、その弟子の林宗達氏から便宜を賜った。朱浤源氏は駐印遠征軍中の将軍に関する伝記研究を長年にわたって進めている。孫立人は、蒋介石と共に台湾に渡った後、一時はアメリカとの個人的パイプ故に全軍の司令官ともなったが、やがて蒋介石から疑いを掛けられ長期間軟禁状態に置かれてきた。こうした個人的パイプは、ビルマでの戦いの最中に築かれたものであるし、台湾で孫立人が初めて台湾で組織した、「女青年大隊」は、ビルマ戦線で目撃した米軍の女性部隊をモデルとしたとも考えられる。いずれにせよ、朱浤源氏は、孫立人が台湾の民主化によって解放された直後に、孫立人と面会しインタビューもしておられるので、近く長年の成果をまとめられる予定である。関係資料についての閲覧をさせていただいたことに対して、厚く感謝申し上げ、孫立人研究の一刻も早い完成を願って止まない。

(6) 防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書 イラワジ会戦－ビルマ防衛の破綻』朝雲新聞社、1969年、277頁。

⑺　RG111：SC230148　写真の裏側には、以下のようなキャプションが付されている。

A JAPANESE GIRL CAPTURED IN VILLAGE ON SUNGSHAN HILL BY TROOPS OF CHINESE 8 TH ARMY. WHEN ALL JAP MEN WERE KILLED IN CAVE, THE CHINESE SOLDIERS FOUND THIS GIRL HIDING IN CORNER OF CAVE. CHINESE SOLDIERS CALLING ARMY HQS. TO TELL OF THE CAPTURE.（大文字原文）

⑻　RG111：SC247349。９月７日に撮影された写真には以下のようなキャプションが付けられている。

Tec 5 Myer L. Tinsley, Yarnaby, Okla., gives first aid to Japanese girl wounded by Chinese 8 th Army artillery and taken prisoner from cave on Sung Shan Hill where Jap soldiers were all killed trying to hold the cave. Two Chinese soldiers display captured Jap flag. China, 9/7/44; Signal Corps Photo #CBI-44-29992（Pvt. Charles H. Hatfield）, from 164 Sig Photo Co, released by PRD 7/15/46. Orig. neg. Lot 12541 pg.

⑼　西野留美子『日本軍「慰安婦」を追って』マスコミ情報センター、1995年、136頁。

⑽　陸軍一級上将黄杰『嗔西作戦日記』国防部史政局、1982年、307頁。

⑾　前掲『イラワジ会戦』、289頁。

⑿　RG111：SC212091（CBI-44-60370）キャプションの原文は以下である。

15 Sept 44 PHOTO BY T/4 FRANK MANWARREN　BODIES OF JAP TROOPS AND WOMEN （下線部は手書きにより挿入）KILLED IN THE CITY OF TENGCHUNG WHEN THE CHINESE TROOPS STORMED THE TOWN.

⒀　CBI-44-60371, 15 Sept 44 PHOTO BY T/4 FRANK MANWARREN BURIAL PARTY STARTING TO WORK AT INTE□□NG（２文字手書きにより修正、INTERRNGと読める。しかしINTERROGの書き間違えか）THE WOMEN KILLED AT TENGCHUNG WHILE THE JAPANESE AND CHINESE TROOPS FOUGHT OVER THE CITY. MOST OF THEM ARE KOREAN WOMEN KEPT IN THE JAP CAMP.

⒁　前掲『イラワジ会戦』、80－87頁。

⒂　陶達綱『嗔西抗日血戦写実（民国三三年－三四年）』中華民国国防部史政編訳局、1988年。

⒃　中国語原文は「狼狽不成人形」。眼をぎらぎらさせ、髪の毛が汚れきった浮浪者などに使う言葉で、日本語の狼狽とは異なる。この点は、坪田敏孝氏からご指摘頂いた。

⒄　「遠征軍第二十集団軍総司令霍揆彰自保山報告攻占来鳳山及騰衝経過電－民国三十三年九月十四日」、中国国民党中央委員会党史委員会『中華民国重要史料初編－対日抗戦時期第二編作戦経過』1981年、507－508頁。

⒅　三浦徳平『一下士官のビルマ戦記－ミートキーナ陥落前後』葦書房、1981年、247－248頁。

⒆　前掲『イラワジ会戦』、59頁。

⒇　カール・ヨネダ『アメリカ情報兵士の日記』PMC出版、1989年、100頁。

㉑　前掲『イラワジ会戦』、53頁。

㉒　RG111：SC262578 写真の裏に付いているキャプションの原文は、以下の通り。Sgt. Karl Yoneda, San Francisco, Calif., Japnese interperter（ interpreter の誤りか), questions Kim a Japanese “Comfort Girl” at the M.P. Stockade on the Air strip, while Edward J. St. John, Franklin, Maos. Stands guard in the rear. Kim served as a nurses aid in Myitkyina.

Burma, India. 3 Aug 1944. ㈶女性のためのアジア平和国民基金編『政府調査「従軍慰安婦」関係資料集成⑤』（以下『政府調査資料⑤』とのみ記す）龍溪書舎、1998年、215頁にも、同写真及びそのキャプションが写真製版にて掲載されている。

(23) カール・ヨネダの日記を翻訳したとされる、『アメリカ情報兵士の日記』（PMC出版、1989年）によれば、その経歴は以下の通り。1906年ロサンゼルスに生まれる、1913年来日、広島中学校に学ぶ、1926年帰米後、労働運動に従事、1933年アメリカ共産党日本語機関紙『労働新聞』主筆。1942-45年米軍情報部軍曹として従軍、1957年国際沖仲仕・倉庫員組合の活動家、1983年サンフランシスコより名誉表彰状。この経歴には、書かれていないが、戦後のマッカーシズムの時代には、元OWIのオーウェン・ラティモア同様ひどい弾圧を受けたはずである。

(24) ヨネダ、前掲書、4－5頁。

(25) 同上、74頁。

(26) 同上、96頁。

(27) 同上、97－98頁。

(28) 同上、101頁。

(29) 同上、109頁。

(30) Won-loy Chan, Burma The Untold Story., Presidio Press, 1986, pp. 3～4.

(31) 同上、pp. 92-93.

(32) 原文は、“Kim was a “comfort girl” and looked the part in an above-the-knee length dress that was obviously all she was searing.” 西野留美子は、「looked the part in ～dress」の部分を、「膝上までの衣服しかつけていないように見えた」と訳しているが、これはlookが第２文型の動詞であり、その補語として、the part が機能しており、theという定冠詞が、その直前のcomfort girlを指していることを見逃している。英語構文の理解が不可能なまま、何とか日本語にこじつけた訳といわざるを得ず、チャンからは彼女が慰安婦という役のように見えたというのが直訳である。西野留美子『日本軍「慰安婦」を追って』マスコミ情報センター、1995年、131－132頁。

(33) Japanese Prisoner of War Interrogation Report No.49., October 1, 1944. RG226 OSS E154 BOX 102 FIELD STATION FILES KANDY - REG - INT -7 thru 8 A-1, Entry 154, OWI miscellaneous material. この資料の写真製版は、『政府調査資料⑤』203－209頁に収録されており、日本語訳は吉見義明編『従軍慰安婦資料集』大月書店、1992年、439-452頁に掲載されているが、脱出の経過に関しては449頁を参照。

(34) 東南アジア翻訳尋問センター「心理戦尋問報告第二号」1944年11月30日、吉見編、前掲書、459頁。

(35) 前掲書。

(36) Japanese Prisoner of War Interrogation Report No.48（Interrogation of Miyamoto Kikuye）RG226 OSS E154 BOX 101. この資料を最初に発見されたのは方善柱先生であり、「米国資料に現われる韓人〈従軍慰安婦〉の考察（韓国語）」（『国士館論叢』第37集、1992年）という論文がまとめられている。その中ではキムが、最初慰安婦とされたものの、実は、看護婦であったことが、日付を根拠に簡単に触れられている。またこの尋問記録は、キムがひどい差別的待遇に置かれてきたことを証明する資料として位置付けられている（234－235頁）。

(37) Chan、前掲書、94頁。ここで、チャンはミチナ陥落の３日の時点で、約21名の慰安婦がそこにいたとも述べているが、チャンの意図は、３日に少なくとも21名がいて、その内1人は３日

の時点で捕虜になり、その残りの20名余が３日の夜に脱出し、１週間後に捕虜となったという形の事実理解を組み立てることにあった。これを見ても、慰安婦達の脱出が、実は31日の夜であったという尋問記録をチャンが見ていないのは明らかである。

㊳　前掲『政府関係資料⑤』215頁。

㊴　前掲『イラワジ会戦』51、53頁。

㊵　吉見編、前掲書、452頁。

㊶　同上、459頁。

㊷　同上、458-459頁。

㊸　同上、464頁。

㊹　菊山砲第十八連隊史編集委員会「砲声」（太田毅『40年目のビルマ戦』葦書房、1983年、237-238頁より重引）

㊺　吉見編、前掲書、456頁。ハ（河）の名前は、Hとのみ記載されている。

㊻　RG226 OSS E154 BOX 101　Interrogation of U KIN NAUNG and TAN LEO.

㊼　文玉珠語り・森川万智子解説『ビルマ戦線楯師団の「慰安婦」だった私』梨の木舎、1996年、179-180頁にも、ビルマ中部にあるビルマ第２の都市マンダレーに駐留した55師団が、イギリス軍の残したスコッチウィスキーや、武器・食料・車両を自由に使っていた記述がある。

㊽　和田春樹「『慰安婦』問題の歴史を考える」、大沼保昭・下村満子・和田春樹編『「慰安婦」問題とアジア女性基金』東信堂、1998年、8頁。

㊾　この説は、筆者が、ワシントンで調査をしていた折、方善柱教授から最初に示唆を受け、それを更に私なりに展開したものである。

㊿　Chan、前掲書、95-97頁。

(51)　西野、前掲書、133頁にも、同じ個所からの翻訳があるが、何故慰安婦達が笑い、泣き出したのか、チャンは何故胸を締め付けられるように感じたのかについて、訳出に誤りがある。

(52)　ラングーンにいた朝鮮人の慰安婦は、「アリラン部隊」と呼ばれていた。榊山潤『ビルマ日記』南北社、1963年、194頁。55師団司令部付の慰安婦であった、文玉珠も1942年7月10日釜山から出発した輸送船に、ミチナに送られた女性達と共に乗り込んでいたが、船中では出身地対抗演芸会が頻繁に開かれ、朝鮮各地域の様々なバリエーションのあるアリランが最後に歌われたという。この船には、全部で703名の朝鮮の女性達がのっており、もしかすると、拉孟に送られた慰安婦達も、6月ではなく7月にこの船で送られたのかもしれない。文玉珠、前掲書、52、181-182頁。

(53)　Chan、前掲書、95頁。ここでチャンは、「それまで女性の売春婦が日本人に奉仕しているという話を聞いたことはあったが、半分しか信じていなかった。しかしそれが今目の前にいる」という表現で驚きを示している。これを見ても、最初に捕虜となったキムのことを「慰安婦」と認定したのは、後のことであることが分かる。

(54)　文玉珠、前掲書、182頁。

(55)　小野沢あかね「『国際的婦女売買』論争（1931年）の衝撃－日本政府の公娼制度擁護論破綻の国際的契機－」、津田塾大学『国際関係学研究』No.24、1997年、93－110頁。1931年来訪した国際連盟婦女売買調査団に対し、日本政府は公娼制度を擁護すべく、強制性を伴わない売春斡旋を婦女売買とは認めないとする見解に立って反論したが、前借金契約の違法性や、女衒などの芸娼妓斡旋業の不道徳性自体に対しては沈黙せざるを得ず、それが内務省をして公娼制廃止へと歩み出させるまでに至ったことが述べられている。日本軍による慰安婦制度は、こうした前借金契約の違法性を不問にし、売春斡旋業者を許可制とし管理することを本質としていたといえよう。